

ヨロ文入門のための推薦図書

ブックガイド

2025

目次

読書する青春のために — あなた自身の金の鉱脈を探せ.....	1
有田英也（ヨーロッパの文学、文化批評）.....	2
下田和宣（ドイツ語圏の思想と文化）.....	3
高名康文（中世フランス文学、現代フランス事情）.....	4
高原照弘（フランス文学、17～18世紀フランス文化）.....	5
滝沢明子（広域芸術論）.....	5
時田郁子（ドイツ語ドイツ文学）.....	7
中野智世（ドイツ史）.....	7
中山 俊（フランス史）.....	8
西脇沙織（言語学、意味論、語用論）.....	9
明星聖子（比較文化論）.....	10
村瀬 鋼（フランス思想・哲学）.....	11
吉川 斉（ギリシア・ローマ古典文化）.....	13

2025年4月 ヨーロッパ文化学科

ヨーロッパ文化学科の1年生の皆さんへ

読書する青春のために — あなた自身の金の鉱脈を探せ

ヨーロッパ文化学科の教科内容に属する各分野の基本的な文献を先生方に挙げていただきました。どれも、若いときに読んでおくとい生の糧になるような、重要な書物です。一度は手にとり、眼を通して損はありません。ゆっくりと本の世界をさまようぜいたくが出来るのも皆さんの年頃しかありません、今のうちですよ。読書する青春のために、ぜひこの読書案内を利用してください。

とはいえ、このブックガイドは、とりわけ、次のような具体的な目的を想定してあります。

◆今から卒論をにらんで

専門的な学習に入っていく3年生になったとき、戸惑わないためにも、そして、四年間の知的生活が立派な卒業論文として結実するためにも、1・2年生のうちに興味のあるものから読んでおくことが大事です。今のうちから、3年生、4年生で取り組むことになる卒業論文でどのようなテーマを選ぶか、自分の興味がどこにあり、その関心をどの方向に伸ばしたら学生生活が豊かなものになるのか、様々な本にあたって、自分の中の鉱脈を探してみてください。思いがけないところに、金の鉱脈が埋まっているかもしれません。そのためにも、広範囲な分野での重要文献を挙げてあるこのリストを活用してください。

◆日々の道しるべとして

皆さんは様々な授業で、レポートや論文などの課題を課されることがあるでしょう。そのようなとき、その分野の必読文献が何か、参考図書を探す段階で既に壁に突き当たるかもしれません。もし、その科目が必ずしもヨーロッパ文化学科の科目でなくとも、自分が書こうとしているテーマが、このパンフレットの中のいずれかの分野に関係があるならば、このブックガイドが本を探す良い道しるべになるかもしれません。もちろん、ヨーロッパ文化学科の授業科目のほとんどで、このガイドが文献案内として役に立つことはいうまでもありません。学校の授業で、何かの必要にせまられて本を探さなければならないとき、このブックガイドが役に立たないか、開いてみて損にはならないでしょう。

いずれにせよ、このブックガイドが皆さんの学業の助けとして、また、人生の春の季節を豊かにするための一つの道しるべとして、役に立つことを願っています。

有田英也（ヨーロッパの文学、文化批評）

まず、新入生になんとか読み通してもらいたい本を挙げる。1と2は、がんばれば四、五日で読める文庫、新書サイズの本。3は拾い読みできる。

1. 多和田葉子『エクソフォニー 母語の外へ出る旅』岩波現代文庫

作者はドイツ在住のドイツ語／日本語作家。「／」を付けたのは両方で書いているから。第1部は「ダカール」「ベルリン」「ロサンジェルス」「パリ」と、まるで旅日記のようだが、それぞれ言語についての深い考察になっている。すごいのは第2部の「実践編」。母語の外はどう見えて、どう聞こえているのだろうか？

2. 鳥飼玖美子／刈谷夏子／刈谷剛彦『言葉の教育を問いなおす』ちくま新書

執筆者は英語教育、国語教育、教育社会学のスペシャリスト。「はじめに」で書き言葉による対話つまり「対書」と言われているように、それぞれの立場から、大学入学試験について、ことばの力の鍛え方について、レオ・レオーニの「スイミー」の読み方（英語原文と訳文）について、様々な主題を論じています。読んだり書いたり話したりする時、自分がどんな仕事をしているのか省みるのに有益な本です。

3. 野崎敏編著『フランス文学を旅する 60 章』明石書店

エリアスタディーズ（地域研究）と題されたシリーズの1冊。60人のフランス語作家にちなんでパリやフランスの地方、あるいは旧植民地の地理と文化を語りながら、旅案内と作品紹介を兼ねます。私の担当は、パリ（の庶民地区とセーヌ河畔）、北フランス、南仏で、とりあげた作家は、ジッド、セリーヌ、ペレック。とりあえず、大学図書館を旅してみてください。

次は、ヨーロッパの文学・思想から。おおむね文庫サイズで。

4. ユゴー『ノートル＝ダム・ド・パリ』（上・下）岩波文庫

宿命に翻弄されながら人生を切り開く三人の登場人物が魅力的だが、話の大筋から外れたかの第5編第2章の「印刷術は教会を滅ぼすだろう」という一節は、この小説と大聖堂の関係を想うと意味深長。

5. チャペック、『園芸家の一年』平凡社ライブラリー

チェコの作家チャペックの存在は、ユーラシア大陸の「半島」ヨーロッパが、小国の集まりだと教えてくれる。これはドイツ語からの重訳でなく、チェコ語原典からの翻訳。

6. ベンヤミン『子どものための文化史』平凡社ライブラリー

ベンヤミンの主著はこれではなく、芸術論なら「複製技術」「アウラ（オーラ）」といった術語が大切だろう。けれども、切手、人形劇、大道芸、ジプシー（流浪の人びと）、カリオストロ、おもちゃ、といったテーマについてのエッセイは、ここ10年ほど「幼年時代の回想」「思春期小説」というフランス文学のジャンルについて勉強しているわたしにとっ

て珠玉の作品ばかり。

7. コクトー、河盛好蔵訳『山師トマ』角川文庫

フランス映画によく出てくる愛すべき不良たちの泣き笑い。これで卒論を書いた学生もいました。

8. カミュ『異邦人』と『ペスト』新潮文庫、岩波文庫、光文社古典新訳文庫

同じ作家が書いたとは思えない2作だが、発表は5年しか隔たっていません。登場人物の誰に視点を置くかで物語の意味がまったく違ってきます。フランス文学は恋愛をネタに心理を書き込むのが特徴の一つ。ところが、『異邦人』の主人公で語り手のムルソーは恋愛不適格者のようです。また、長編小説は、しばしば旅と冒険を語りますが、『ペスト』は街から出られない人々の、地味で絶望的な戦いを語るヒューマンドラマ。新型コロナウイルスという見えない恐怖に、この小説を思い出した大人は多かったでしょう。

下田和宣（ドイツ語圏の思想と文化）

哲学や宗教を学ぶことは、ヨーロッパ文化を深く知るうえで不可欠です。たしかに初心者にはとっつきにくいところもありますが、大事なのはわからなくても焦らないこと。時間をかけてゆっくりと知識を得ながら、考え方に馴染むことです。そのためにはまず自分でも頭を動かしながら楽しむのが大事です！

1. ジム・ホルト『世界はなぜ「ある」のか？——「究極のなぜ？」を追う哲学の旅』寺町朋子訳、ハヤカワ文庫、2016年

：なぜ何もないのではなく、何かが「ある」のでしょうか。答えなんてないんじゃないか、わたしが現に生きていることがすべてだ、と思われるかもしれませんが、この問いについて考えるということ以外には得ることのできないものもたしかにあると思います。

2. 伊藤邦武『宇宙はなぜ哲学の問題になるのか』、ちくまプリマー新書、2019年

：存在について考えることは宇宙の謎について考えることでもあります。

3. 中島義道『哲学の教科書』、講談社学術文庫、2001年

：学ぶことができるのは既存の哲学ではなく「哲学すること」だけだ、と言われますが、まさに「哲学する」とはどういうことなのかを身をもって示してくれる本です。

4. 御子柴善之『自分で考える勇気：カント哲学入門』、岩波ジュニア新書、2015年

：ドイツ最大の哲学者のひとりであるカントについての入門書です。岩波ジュニア新書は中高生でも理解できるように書かれた叢書ですので、とっつきやすいのではないかと思います。ちなみにカント『純粋理性批判』、ヘーゲル『精神現象学』、ハイデガー『存在と時間』は、ドイツ哲学「三種の神器」と呼ばれたりします。どれも3000メートル超級の高峰なので、トライするにしてもそれなりの下調べと心構えが必要です。

5. 野田又夫『西洋哲学史——ルネサンスから現代まで』、ちくま学芸文庫、2017年

: 西洋哲学の歴史についての昔から定評のある本です。

6. 竹下節子『キリスト教入門』、講談社学術文庫、2023年

: キリスト教はヨーロッパの精神的な中心です。キリスト教の知識は他の何を学ぶのにも役に立ちます。

7. 稲垣良典『神とは何か——哲学としてのキリスト教』、講談社現代新書、2019年

: 宗教とは何か、神とは何か、その本質を問う学問を「宗教哲学」と言います。宗教について深く考えてみたい人はぜひ。

8. ラルフ・コナースマン『文化哲学入門』下田和宣訳、知泉書館、2022年

: 文化とはそもそも何でしょうか? 「文化哲学」の教科書です。

9. ヤーコブ・フォン・ユクスキュル『生命の劇場』、講談社学術文庫、2012年

: 人間の文化について考えるためには、動物や植物など、ほかの生命からもヒントを得ることができます。ドイツの田園風景をバックに、生命とは何かをめぐって繰り広げられる対話篇です。

10. 石田勇治・佐藤公紀・柳原伸洋・宮崎麻子・木村洋平編『ドイツ文化事典』、丸善出版、2020年

: 哲学も宗教もヨーロッパ文化の一部です。なのでそれらを生み出した文化的な経緯と歴史的な文脈を知ることが、よい入門になるでしょう。本書は網羅的な紹介として、ぱらぱらと覗いてみるだけでもドイツ文化についての全体的なイメージをつかめるのではないかと思います。入門書としてはまた、浜本隆志・高橋憲編著『現代ドイツを知るための67章(第3版)』、明石書店、2020年および浜本隆志・柳原初樹編著『最新ドイツ事情を知るための50章』、明石書店、2009年もわかりやすく行き届いているものです。タイトルは似ていますが前者は文化全般、後者は社会事情に特化して解説されています。

高名康文（中世フランス文学、現代フランス事情）

日本語で読める中世フランス文学の本で、楽しんでもらえるだろうものを紹介します。中にはいま書店に出回っていないものもありますが、大学や公共の図書館に蔵書されています。騎士と姫の恋が描かれていて、比較的とりつきやすいものとしては、

1. ベディエ編、佐藤輝夫訳『トリスタン・イゾー物語』岩波文庫

2. マリー・ド・フランス作、月村辰雄訳『12の恋の物語』岩波文庫

3. 新倉・神沢・天沢訳『フランス中世文学集』全4巻、白水社

があります。3は中世文学のアンソロジーです。2巻と4巻に収められたアーサー王の物語がお勧めです。一方、愛や恋に懐疑的になっている人に勧めたいのは、

4. 鈴木・福本・原野訳『狐物語』岩波文庫

5. ギヨーム・ド・ロリス、ジャン・ド・マン作、篠田勝英訳『薔薇物語』ちくま文庫
6. フランソワ・ヴィヨン作、天沢退二郎訳『ヴィヨン詩集成』白水社
です。
7. 原野昇編『フランス中世文学を学ぶ人のために』世界思想社
がもっと詳しい読書案内になるでしょう。また、原典に接するためにはどのような勉強をしなくてはならないのかを知ることができるでしょう。
学部でゼミを担当する現代フランス事情については、
8. 井上たか子編著『フランス女性はなぜ結婚しないで子どもを産むのか』勁草書房
9. 伊達聖伸『ライシテから読む現代フランス』岩波新書
10. 宮島喬『移民社会フランスの危機』岩波書店
を挙げておきます。現代フランスの魅力ばかりではなく、この国が抱える様々な問題が見えてくるでしょう。

高原照弘（フランス文学、17～18 世紀フランス文化）

1. デカルト『方法序説 ほか』野田又夫訳ほか 中公クラシックス 2001 年
2. ルネ・デカルト『方法序説』山田弘明訳 ちくま学芸文庫 2010 年
3. 山田弘明『デカルト『方法序説』』晃洋書房 哲学書概説シリーズ I 2011 年
4. 『ラ・ロシュフコー箴言集』二宮フサ訳 岩波文庫 1989 年
5. 塩川徹也『パスカル『パンセ』を読む』岩波書店 2014 年
6. ルソー『人間不平等起原論』本田喜代治・平岡昇訳 岩波文庫 1972 年改訳
7. ルソー『人間不平等起原論／社会契約論』小林善彦／井上幸治訳 中公クラシックス 2005 年
8. ルソー『エミール』今野一雄訳 岩波文庫 上・中・下 1962～64 年
9. 長谷川輝夫・大久保桂子・土肥恒之『ヨーロッパ近世の開花』中公文庫 世界の歴史 17 2009 年
10. 松本宣郎編『キリスト教の歴史 1』山川出版社 宗教の世界史 8 2009 年
高柳俊一・松本宣郎編『キリスト教の歴史 2』山川出版社 宗教の世界史 9 2009 年

滝沢明子（広域芸術論）

▼「読書」そのものについて問い直す

1. ピエール・バイヤール著『読んでいない本について堂々と語る方法』、大浦康介訳、ちくま学芸文庫、2016 年

「その本は読んだことがありません」と素直に言える人はどれだけいるのでしょうか。私も皆さんに、読んでいない本を勧めているかもしれません！

2. ショウペンハウエル著『読書について』、斎藤忍随訳、岩波文庫、1983年

フランス人の先生が授業中にこの本のなかの一節「読書は、他人にもものを考えてもらうことである」を紹介したことがありました。読書は自分の頭を使わない恥ずべき行為だということです！その後、先生が自嘲しながら「本を読みすぎる私は怠惰な人間です」と語ったときのショックが鮮明に残っております。

3. ロラン・バルト著『テキストの快楽』、沢崎浩平訳、みすず書房、1977年

この本を携えていた先輩がやたら輝いてみえたあの日、本がオシャレアイテムになりうることを知ったのでした。もちろんオシャレなだけではなく実際に知的興奮に満ちた書物です。

▼ 学問、講義、論文について考える

4. ジャック・ランシエール著『無知な教師』、梶田裕／堀容子訳、法政大学出版局、2011年

知識を伝えない教師について書かれた最初の数十ページだけなんども読み返して、「自分の知らないことを教えることができる、そんなことが本当にあるだろうか」と心を揺さぶられ、刺激を受け続けています。

5. V. ナボコフ著『ナボコフの文学講義』上下、野島秀勝訳、河出文庫、2013年

『ロリータ』の作者であるナボコフが、珠玉の文学作品の解説を通してプロの小説の読み方を伝授します。挿入されている講義ノートの図版も面白いです。

6. ウンベルト・エコ著『論文作法』、谷口勇訳、而立書房、1991年

論文を執筆するさいの注意点や考え方について、至極真っ当で正しいアドヴァイスが得られるうえ、名文の数々を通して読書の深い喜びを味わえるという唯一無二の書物といえます。

▼ 広域芸術論につながりそうな本

7. ベラ・バラージュ著『視覚的人間—映画のドラマツルギー』、佐々木基一・高村宏訳、岩波文庫、1986年

1924年、サイレント映画の時代に書かれたにもかかわらず、現代の我々に新鮮な驚きと発見をもたらしてくれる素晴らしい本です。

8. エルヴェ・ギベール著『幻のイマージュ』、堀江敏幸訳、集英社、1995年

写真にまつわる愛のエピソードが、繊細に意地悪にそして卑猥に綴られます。写真と文学の関係を考えるうえでも非常に重要な作品です。

9. デュラス／コクトー著『アガタ／声』、渡辺守章訳、光文社古典新訳文庫、2010年

マルグリット・デュラスの『アガタ』とジャン・コクトーの『声』という二つの戯曲が収められています。戯曲なので幾度となく上演されており、また『アガタ』はデュラス自身が映画化しています。舞台演出や映像化について考察するきっかけを与えてくれるでしょう。

10. 田村毅、塩川徹也他編著『フランス文化事典』、丸善出版、2012年

フランスの芸術、文化、社会についての様々なトピックスがぎっしり詰め込まれている事

典です。目次をみて好きな箇所を読んでいけばよく、自分に興味のある分野を探すのいうってつけです。

11. 中野京子著『怖い絵』、角川文庫、2013年

美術、とくに絵画について入門的な面白い本はないかと友人に尋ねたところ、「そんなに好きじゃないのだけれど、手に取りやすい有名な本」と、これが挙がりました。私はこれから読みます。

時田郁子（ドイツ語ドイツ文学）

高校までの教科書に載る類の小説とは異なる作品を挙げますので、まずは手に取ってください。悪者や幽霊が活躍する、品行方正・勸善懲悪とは無縁の世界と出会えます。大学では、自分で工夫する必要がありますが、時間がたっぷりあります。長編小説に挑戦するとよいですよ。

文学入門

1. 種村季弘『詐欺師の楽園』岩波現代文庫、2003年
2. 種村季弘『山師カリオストロの大冒険』岩波現代文庫、2003年
3. 種村季弘『ぺてん師列伝あるいは制服の研究』岩波現代文庫、2003年

長編小説

4. (石川栄作訳)『ニーベルンゲンの歌（前編・後編）』ちくま文庫、2011年
5. ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（山崎章甫訳）『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代（上・中・下）』岩波文庫、2000年
6. E・T・A ホフマン（深田甫訳）『悪魔の霊酒（上・下）』ちくま文庫、2006年
7. シュテファン・ツヴァイク（中野京子訳）『マリー・アントワネット（上・下）』角川文庫、2007年
8. トーマス・マン（岸美光訳）『詐欺師フェーリクス・クルルの告白（上・下）』光文社古典新訳文庫、2011年

中野智世（ドイツ史）

ドイツの歴史に関する本は山のようにありますが、ここでは自分のお目当ての本に出合うための最初の道案内になるような本をいくつかあげておきます。以下の本のなかにも参考文献があげられていますから、そこから面白そうな本を探っていくてください。

まずは、トピック別になっていて、興味のあること、面白そうなところだけを選んで読むこともできる以下のシリーズ。

1. 森井裕一『ドイツの歴史を知るための 50 章』明石書店、2016 年
2. 浜本隆志ほか『現代ドイツを知るための 67 章』明石書店、2020 年

次のステップとして、ドイツ史の流れ全体をつかめる「通史」があります。最初から最後までを通して読まなくても、ちょっと調べたい時代、興味があるところだけをさっと見るだけでも役立ちます。

まずは、カラー図版満載で最も手軽ですが、内容はしっかりしている以下のもの。

3. 石田勇治編『図説ドイツの歴史』河出書房新社、2007 年
もう少し体系的に学びたい人には、次のものがスタンダードです。
4. 若尾祐司・井上茂子『近代ドイツの歴史』ミネルヴァ書房、2005 年
さらに、マンガやサブカルチャーなどの文化史もあわせて学べる概説として、
5. 田野大輔・柳原伸洋『教養のドイツ現代史』ミネルヴァ書房、2016 年
ちょっと難しいかもしれませんが、文化史入門としては以下のものがあります。
6. 若尾祐司・井上茂子『ドイツ文化史入門』昭和堂、2011 年
最後に、ゼミ論や卒論を書くときにいろいろと調べるためのツールとなるもの。
7. 成瀬治ほか『世界歴史大系・ドイツ史』1～3 巻、山川出版社、1996～97 年
また、通史の番外編として、通史とテーマ史を組み合わせた以下のもの。
8. 南直人ほか『はじめて学ぶドイツの歴史と文化』ミネルヴァ書房、2020 年
さらに、森・山・川を切り口にドイツ史を辿るユニークなものもあります。
9. 池上俊一『森と山と川でたどるドイツ史』岩波ジュニア新書、2015 年

個別のテーマについては、神聖ローマ帝国から東西ドイツ統一まで、あるいはビスマルクの伝記からアンネの日記まで、読みやすいものから難しいものまでいろいろあります。さしあたり、ドイツ現代史の「王道」として以下のものをあげておきますね。

10. 石田勇治『ヒトラーとナチドイツ』講談社現代新書、2015 年
11. 芝健介『ホロコースト』中公新書、2008 年

中山俊（フランス史）

フランス史になんとなく興味があるけれど、何から手をつけたらよくわからない学生さんのために、15 冊の書籍をピックアップしました。

自分の関心対象がどの時代にあり、どんなテーマに興味を持っているかを把握するために、以下の本の目次からいくつかの章を選んで読んでみましょう。

1. 上垣豊編『はじめて学ぶフランスの歴史と文化』ミネルヴァ書房、2020 年。

2. 佐々木真『増補新版 図説フランスの歴史』河出書房新社、2016年。
3. 柴田三千雄『フランス史10講』岩波書店、2006年。
4. 中野隆生、加藤玄編『フランスの歴史を知るための50章』明石書店、2020年。
5. 平野千果子編『新しく学ぶフランス史』ミネルヴァ書房、2019年。

中世に特化したものであれば（フランス限定ではないですが）6などが、近現代史関連には7などがあります。上記の書籍同様、いずれも平易なものばかりです。面白そうな章から読んでいきましょう。

6. 神崎忠昭『新版ヨーロッパの中世』慶應義塾大学出版会、2022年。
7. 杉本淑彦、竹中幸史編『教養のフランス近現代史』ミネルヴァ書房、2015年。

歴史的人物に焦点を絞った評伝も、とっつきやすいかもしれません。とくに以下の書籍は、どれもコンパクトにまとめられ、大変面白く読めます。

8. 加藤玄『ジャンヌ・ダルクと百年戦争 時空をこえて語り継がれる乙女』山川出版社、2022年。
9. 杉本淑彦『ナポレオン—最後の専制君主，最初の近代政治家』岩波書店、2018年。
10. 林田伸一『ルイ14世とリシュリュー 絶対王政をつくった君主と宰相』山川出版社、2016年。
11. 渡辺和行『ド・ゴール 偉大さへの意思』山川出版社、2013年。

8、10、11、と同じ「世界史リブレット」シリーズ（13、14）や、河出書房新社の「ふくろうの本／世界の歴史」シリーズ（12、15）から、興味のあるテーマの本を選んでみてもよいでしょう。オススメのものをいくつか挙げておきます。

12. 池上俊一『新装版 図説騎士の世界』河出書房新社、2023年。
13. 近藤和彦『近世ヨーロッパ』山川出版社、2018年。
14. 谷川稔『国民国家とナショナリズム』山川出版社、1999年。
15. 竹中幸史『図説フランス革命史』河出書房新社、2013年。

西脇沙織（言語学、意味論、語用論）

私が本を読む時は、本に書いてあることを理解しようとするのは勿論のこと、書いてあることについて、自分はどの点に賛成で、どの点に反対なのか、なぜそう思うのか、考えるようにしています。以下に紹介する本が、皆さんの「考えることの出発点」になれば、嬉しいです。

まずは、分かりやすく、読みやすい、言語学の入門書を挙げます。

1. 佐久間淳一『本当に分かる言語学』日本実業出版社、2013年

次に挙げるのは、ソーシャルとその周辺の言語学者の名著およびその解説書です。ヨーロッ

パ文化学科ではソシュールの学説が教授されてきた伝統があります。2.については、「言語学演習」の授業でも扱います。

2. フェルディナン・ド・ソシュール（町田健訳）『新訳ソシュール一般言語学講義』研究社、2016年

3. エミール・バンヴェニスト（岸本通夫監修、河村正夫ほか訳）『一般言語学の諸問題（新装版）』みすず書房、2022年

4. エミール・バンヴェニスト（阿部宏ほか訳）『言葉と主体』岩波書店、2022年

5. 丸山圭三郎『言葉とは何か』ちくま学芸文庫、2008年

6. 丸山圭三郎『ソシュールを読む』講談社学術文庫、2012年

7. 町田健『コトバの謎解き ソシュール入門』光文社新書、2003年

次の本は、「言語」という観点からヨーロッパの歴史と現在を知り、考えたい方におすすめです。「ヨーロッパ文化実習1」の授業でも、この本を取り上げます。

8. クロード・トリショ（西山教行ほか訳）『多言語世界ヨーロッパ』大修館書店、2019年
次は、皆さんがレポートや卒業論文などを書く時に役立つであろう本です。私も文章を書く時、参考にしています。書くとは何か、文章とは何か、考えさせられる本でもあります。

9. 木下是雄『理科系の作文技術』中公新書、1981年

最後に、私が専門とする「意味」について、日本語で読める本の中で、私が特に好きなものをあげます。著者はフランス人の分析哲学者で、言語哲学と心の哲学の専門家です。

10. フランソワ・レカナティ（今井邦彦訳）『ことばの意味とは何か』新曜社、2006年
それでは、皆さん、良い読書を！

明星聖子（比較文化論）

◎できるかぎり文庫や新書で、手にとりやすく、読みやすい本を選んでみました。

○「比較文化演習」の授業で、紹介する予定の本です。授業では、詳しく扱う時間がないので、ぜひ各自で入手して、チャレンジしてみてください。

1. プラトン『国家』（上、下）岩波文庫、1979年

2. ゲーテ『若きウェルテルの悩み』岩波文庫、1978年

3. シェイクスピア『ハムレット』新潮文庫、1967年

4. カフカ『カフカ短編集』岩波文庫、1987年

5. カフカ『城』新潮文庫、1971年

○ 私が専門とするカフカ研究および編集文献学の入門書です。

6. リッチー・ロバートソン『カフカ』（「一冊でわかる」シリーズ）岩波書店、2008年

7. 明星聖子・納富信留編『テキストとは何か』慶應義塾大学出版会、2015年

- ドイツ語圏の文学や思想に関心を持ったら、読んでみてください。
- 8. 手塚富雄・神品芳夫『ドイツ文学案内』岩波文庫、1993年
- 9. カント『永遠平和のために／啓蒙とは何か』光文社古典新訳文庫、2013年

○論文を書くとき、とても参考になる本です。シンプルで、わかりやすい文章を書くコツが書かれています。

- 10. 木下是雄『理科系の作文技術』中公新書、1981年

村瀬 鋼（フランス思想・哲学）

- 1. 森有正『生きることと考えること』講談社現代新書、1984年

著者は、日本人としてフランス哲学の核心にあるものを最も深く汲んだ思想家の一人です。安定した地位をなげうって四十歳近くからフランスに移り住んだ彼は、日本とヨーロッパとの鋭い差異の底で、日本でもヨーロッパでもないただの〈私〉の経験に直面します。そんな思考の経緯をかみくだいて語った本。

- 2. デカルト『省察』

デカルトは『方法叙説』が一番有名で、そっちもぜひ読んで欲しいのですが、哲学の本としてはむしろ『省察』を奨めます。『省察』は、〈私〉を主人公にした思考の冒険譚です。面白いです〈私〉とは、むろん、いまこれを読んでいるあなたのことでもあります。とりあえず「第二省察」まで読んでみて下さい。「あ、私ってこれだ」ということがわかる仕組みになっています。翻訳はいくつかあるので、読みやすそうなものを選んでください。

- 3. ベルクソン『思想と動くもの』、河野与一訳、岩波文庫、1998年

ベルクソンはフランス哲学でデカルトと並んで大きなまた個性的な哲学者です。「時間」と「私」と「生命」を主題にした彼の驚くべき哲学の入門として、論文集『思想と動くもの』のなかの「形而上学入門」（ただしこの訳書では「哲学入門」と訳されている）と「変化の知覚」という二つの論文を勧めます。読んだ後では世界の見え方がすっかり違ってしまふような、そんな論文たちです。翻訳はいくつかあり、白水社のベルグソン全集に収められているものが一番読みやすいですが、入手の便の点からここでは岩波文庫版を挙げました。

- 4. 夏目漱石『私の個人主義』講談社学術文庫、1978年

「私の個人主義」は、最晩年の漱石が、自分自身の青春期の煩悶を辿り直しながら、「私」が「私」の生を生きるということの意味について学生たちに語った、日本版の『方法叙説』とも言える講演です。「私はこの世に生れた以上何かしなければならん、とって何をして好いか少しも見当がつかない。私はちょうど霧の中に閉じ込められた孤独の人間のように立ち竦んでしまったのです…」。

- 5. 内田樹『寝ながら学べる構造主義』文春新書、2002年

著者は『おじさんの思想』で有名になった名エッセイストでもありますが、実は現代フラ

ンス思想の或る分野の専門家。でもこの本は、「専門的な論文などを読むと頭痛がしてくる」と言う著者が、あえてシロウトの視点からいわゆる「現代思想」を噛み砕いて説明した本。知識内容以前に、その素朴で正しい姿勢を学んでほしいと思います。

6. 千葉雅也『現代思想入門』講談社現代新書、2022年

もう一冊、「現代思想」入門の本を紹介しておきます。著者は元々は現代フランス哲学の研究者ですが、多分野に関心を持ちたくさんの本を書いている売れっ子です（小説家でもあります）。その文才とセンスを生かして、難解とされている「現代思想」のエッセンスについてとても分かりやすく語ってくれている本。

7. トマス・ネーゲル『哲学ってどんなこと？ とっても短い哲学入門』、岡本裕一郎訳、昭和堂、1993年

私とは？他人とは？よく生きるとは？知るとは？といった哲学の基本的な問いに関する哲学的考察の基本形を、どんな専門知識も前提とせずどんな書物も引用せずに簡潔にシミュレーションした、哲学入門のお手本のような本です。

8. 永井均『〈子供〉のための哲学』講談社現代新書、1996年

ニーチェも思想家の最高の境地として「子供」を挙げていますが（同じ永井さんの『これがニーチェだ』講談社現代新書などを参照）、哲学は、ある意味ではじっさい子供の思考です。子供のとき、「いまここに私がいる」ということの不思議さに驚いたことはありませんか。

9. 鷲田清一『じぶん・この不思議な存在』講談社現代新書、1996年

やはり「私」の存在の不思議さが主題なのですが、「私」の絶対的孤独に注目する上記の永井さんとは違って、鷲田さんは、「私」が「他人」なしには成立しえない仕儀を、自分の日常的な感覚をていねいに辿り直しながら示そうとしています。

10. 木田元『現象学』岩波新書、1991年

二十世紀最大の哲学思潮と言える「現象学」について、ぜひその基本的な発想を学んでほしいと思います。

絶好の良書と言えるものは見つかりませんが、日本で出された入門書の最も代表的なものの一つを挙げておきます。

※（付け加えて）

全部は挙げきれませんが、〈講談社現代新書〉は、入門的でありながら本格派でもある、哲学関係の良書の隠れた宝庫です。上掲の人々の他にも、野矢茂樹（『哲学の謎』など）、小泉義之（『デカルト・哲学のすすめ』など）、入不二基義（『時間は実在するか』）、谷徹（『これが現象学だ』）など、日本の新進気鋭の哲学者・哲学研究者たちの気合いのこもった本がめじろ押しです。廉価で入手も容易なので、自分で面白そうなものを探して読んでみて下さい。なお、事典としては『フランス哲学・思想事典』（弘文堂）と『現代フランス哲学入門』（ミネルヴァ書房）が、この分野で信頼できまた使いやすい事典です。

それから、本を買うお金をあんまりケチらないように。読むことで人生全体が一変してしまうような本だってあるんですから！（ただしもちろん、事典類など高価なものは、図書館を積極的に利用してください。）

吉川 齊（ギリシア・ローマ古典文化）

西洋古典関連の本は、高校までの間になかなか自分で手に取ることがないかもしれません。日本ではすでに数多くの作品が翻訳されていますので、まずは選り好みせずに色々なジャンルのものを手にしてみるとよいでしょう。とはいえ、まずは読んでみてほしい古代ギリシア・ローマの作品として、以下の叙事詩を挙げておきます。

1. ホメロス（松平千秋訳）『イリアス（上）（下）』岩波文庫、1992年
2. ホメロス（松平千秋訳）『オデュッセイア（上）（下）』岩波文庫、1994年
3. ホメーロス（呉茂一訳）『イーリアス（上）（下）』平凡社ライブラリー、2003年
4. ウェルギリウス（岡道男・高橋宏幸訳）『アエネーイス』西洋古典叢書、京都大学出版会、2001年

（3.の呉茂一訳は、岩波文庫旧版が出版元を変えて再刊されたもの。1.と読み比べても面白いです。なお、『オデュッセイア』にも岩波文庫旧版の呉茂一訳がありますが、絶版です。）

また、個別の作品ということではなく、西洋古典全般について理解する手引きとして。

5. 葛西康徳、ヴァネッサ・カッツアート、末吉未来、吉川齊編『改訂版：古典の挑戦—古代ギリシア・ローマ研究ナビ』知泉書館、2025年
6. 久保正彰『西洋古典学入門—叙事詩から演劇詩へ』ちくま学芸文庫、2018年
7. 逸身喜一郎『ギリシャ・ラテン文学—韻文の系譜をたどる 15章』研究社、2018年

さらに、西洋古典と後世（とくにルネサンス期）の関わりを垣間見る刺激的な本として。

8. スティーブン・グリーンブラット（河野純治訳）『一四一七年、その一冊がすべてを変えた』柏書房、2012年

その他、西洋ではありませんが、「古典」について考える手がかりとして。

9. 池田亀鑑『古典学入門』岩波文庫、1991年
10. 吉川幸次郎『古典について』講談社学術文庫、2021年

◆本冊子は、ヨーロッパ文化学科ホームページの「各種ガイド・マニュアル等」のページからPDFファイル形式でダウンロード可能です。

<https://www.seijo.ac.jp/education/falit/europe-study/guide/index.html>